政治家の比較文化論（1）

斎 藤 吉 史

Nations and Cultures, through the eyes of eminent statesmen

Yoshifumi SAITO

As the world has become so small, especially after the World War II, political leaders of various countries must keep close contact with each other. They cannot live alone, keeping away from world community. In dealing with other countries, they must have their own views on nations and cultures in the world. Focussing upon three eminent statesmen—Jawaharlel Nehru, the late Prime Minister of India, John Foster Dulles, the late Secretary of State of USA, and Nikita Khrushchev, the late First Secretary of the Communist Party of the Soviet Union, the author is trying to find out their views on various nations and cultures and also to discern the differences among them. One of the articles in this volume deals with Nehru's views before Indian Independence, relying mainly upon his books; Glympses of World History 1934, An Autobiography 1936 and The Discovery of India 1946. Nehru as a historian, avoided that Europe-centered mentality, which was so universal at his time and put special emphasis on the contribution of Asian nations and cultures on the evolution of mankind. The most interesting point which strikes readers is that Nehru believed in China as a peace loving nation and that India and China stood as two pillars of his world outlook.

は し が き
ネールのみた諸民族と文化
1）ネールの足跡と記録
2）ネール史観の特色
3）独立前の世界観
活力を示す4国民
アジア——中国，日本

は し が き

ヘンリー・キッシンジャー米元国務長官は，1970年代前半，官僚機構を経由しない秘密外交と首脳会談方式で，文字通り世界中を飛び回り，今日の国際政治に重要な影響を及ぼした人物である。米中対話を実現し，ベトナムの泥沼から米国の足を抜かせ，さらに中東ではエジプトのソ連離れ，米国，イスラエルへの接近の糸口をつけるなど，その活動はまことに多彩で，またたんげいすべからざるものがあった。1977年1月国務長官辞任後に著わした回顧録（White House Years. 1979. 邦訳「キッシンジャー秘録」）①をみると，その間の事情が書き込まれていて，まことに興味深いが，これを読んで考えさせられるのは，国際政治がいまや極めて密接に連関し合っているということである。米ソ両大国が，グローバルな規模で向き合っているという権力政治的な面が重要な原因だが，同時にそれだけ世界中の

国が緊密に接触し合っており，孤立して存在することがむつかしいことでもある．そこから生れたのがリンケージ（連結）理論②といえよう．

キッシンジャー氏は，1960年代末における米国の世界政策という立場から，ニクソン大統領とともに，対中接近に踏み切るのだが，その多忙の間にあって中国について学者，研究者の意見を聞き，いよいよ中国行きと決ると，パームスプリングスでの休暇に，「中国の哲学，歴史，芸術に関する本をバッグいっぱいになるほど持って」行っている．③

中東については「大統領補佐官になった時，ほとんどなにも知らなかった」④といってるのは驚きだが，1971年に中東を引受けてからは，自身ユダヤ系であるだけに，中東情勢への理解は早かったに違いない．「秘録」をみても，その理解の深さが十分に推測される．

このように，国際的な政治家としては，権力政治の次元でものを考えるだけでなく，それを越えて，接触する国々の実態，国民性などをよく知ることが必要になるだろう．

各国の面積，人口，政治，経済の体制，民族・社会の構造などについて通り一ぺんのことではなく，風土，生活様式や宗教，さらにはその国特有の物の考え方など，いうならば思想，文化の全般にまで及ばねばならないだろう．どの程度までそれらを知っていればいいのかという限度の問題はあろうが，国際的な政治家として，ポイントを押えておくことが大切なことであると思われる．

実際に第2次大戦後の世界でも，国際的に名の高かった政治家たちは，世界の諸国家，民族，文化に対して独自の見方をもっていた．それはいわば今日的な比較文化論ということもできよう．そして政治家のみた比較文化論には，文化人類学者や社会学者の展開する比較文化論とは，また違ったものがあるに違いない．

本論文は，このような観点から，政治家たちの言動に現われた比較文化論を追及しようとしたものである．

対象として取上げるのは，第2次世界大戦後，最も精力的に世界を飛び回り，それぞれ独自に1時期を画した次の3人の国際的政治家である．

1．第3世界からインドの初代首相だったジャワハルラル・ネール(1889—1964年)
2．米国からアイゼンハワー大統領の下で国務長官をつとめたジョン・フォスター・ダレス（1888—1959年）
3．ソ連から共産党第1書記で首相を兼ねたニキータ・フルシチョフ（1894—1971年）

ダレスは1959年国務長官辞任直後に死去し，ネールは1964年首相在任中に死去した．これに対しフルシチョフは1971年まで生きていたが，1964年10月第1書記を解任され，いっさいの公職を退いていた．いずれもすでに故人であるが，1950年代から60年代前半までの世界政治に大きな足跡を残した人たちである．そして，資本主義陣営のリーダー米国，社会主義世界の頭領ソ連，その中間にある第3世界の中心国家インドという異なった国家群を代表する人たちである．そうした国情の違いがどこまで指導者の見方に反映するかという点も調べたい．まずインドのネールからはじめよう．

(注)①桃井真監修，斎藤弥三郎，小林正文，大朏一人，鈴木康雄訳「キッシンジャー秘録」①～⑤，1979～1980年，小学館発行で，邦訳が出ている．
②邦訳「キッシンジャー秘録」①P169
③同上③P139　P161
④同上②P46

1）ネールの足跡と記録

ネールは，1889年11月14日北インドのアラハバードに，富裕な弁護士モチラル・ネール

の子として生れた．先祖はカシミールの出身で，最上層のブラーマン．イギリスに留学しケンブリッジ大学を卒業して帰国し，国民会議派に参加して独立運動に加わった．

合理主義者であり，マハトマ・ガンジーの宗教的で非論理的な行動には，時に批判的になったが，互いにすぐれた資質を認め合い，協力して反英運動を闘った．1929年ガンジーの推挙で国民議会派の総裁になり，ラホール大会でプルナ・スワラジ（完全独立）を決議させた．前後9回，通算10年余を獄中で過ごしたが，独立前の1946年には中間政府を組織した．1947年8月15日インド独立とともに初代首相（外相を兼務）となり，以後1964年5月27日死去するまで，17年間にわたり首相をつとめ，国の基礎を固めた．

外交政策としては，自主独立の非同盟主議をとり，また国内では政治体制としての議会制民主主議，経済体制としての「社会主義」，社会思想としての非宗教主義をとった．

私は1955年初めてネールをみて以来，死の半年前までに何回か会っているが，ネールの人柄，その思想にいたく引つけられた．いまにして思えば，そのころのネールは，1954年6月遺書を書いた後の晩年のネールであった．若い人間形成期の，未熟さも悩みも抱負も，生のままにむき出しにする時期でなく，人間としてはもうでき上り，公的な活動がその生活の大部分を占める，いわば円熟期にあったためかもしれない．私のみたネール思想は，強い歴史意識とインドへの深い愛情という2本の柱に支えられていたように思う．

獄中から娘インディラ（インディラ・ガンジー現首相)に書き送った「世界史督見」(Glympses of World Hisory. London, 1934)②にしても，あるいは文筆家ネールの代表的著述となった「インドの発見」(The Discovery of India. London. 1946)③にしても，世界やインドの歴史を，ネールがいかに理解したかにかかわっている．これに「自叙伝」(An Autobiography, London. 1936)④ を加えたものが，インドの独立前にネールが自ら書いた代表的な3部作である．

この3部作の関係は，ネール自身とインド，世界の3者を同心円のような平板な関係として把えたのでは正しくないだろう．発表の順序が示している通り，世界と自身とを総合するものがインドであったとみるべきであろう．現実に独立以後は，インドがネールの思考と行動の中心にあり，そのほとんど大部分を占めたといえる．

ネールは遺書の中で，自らを育てたガンジスとジャムナの川への深い愛着を語り，遺灰をこれらの川とインドの大地に帰すよう書いているが，それはネール自身もいうように，決して宗教的な意味からではなかった．根のない思想を嫌ったネールの足は，しっかりとインドの土地を踏まえていたのである．

しかし政治家としてのネールが，世界の諸民族，諸文化をどうみたかという主題に則して考えれば，むしろ1947年のインド独立以後，首相兼外相としてのネールが各国の指導者や

(注)①拙著「インドの現代思潮」(1980年，朝日新聞社発行)の第4章「観念論的近代主義」参照

②大山聡訳「父が子に語る世界史」1～6（みすず書房．1959年～1966年）の邦訳がある．以下同訳書からの引用は「世界歴史」として使用する．

③辻直四郎，飯塚浩二，蝋山芳郎訳「インドの発見」上．下(岩波書店，1953年，1956年）の邦訳がある．邦訳「インドの発見」として引用する．

④邦訳は，磯野勇三訳「ネール自伝」上，下（角川文庫，1965年）と，蝋山芳郎訳「自叙伝」（中央公論社，世界の名著63，1967年）の2冊がある．蝋山訳「自叙伝」は抄訳である．

民族と接触して，どう考えたかということの方が，大きい意味をもつ．そして．独立前と独立後とでは，ネールの見方に大きな変化が現われている．とくにそれは中国に対する見方の場合いちじるしい．

独立以後の時期については，ネールが自ら書き残したものはない．したがって折々の発言と外交政策の推移をみるしかない．その主なものとしては，インド政府が出版しているネール発言集⑤のほか，ネール評伝，インド外交史などの文献⑥と新聞，雑誌があり，私はそれらによって分析した．

2）ネール史観の特色

「世界史督見」は，三部作のトップを切って1934年ロンドンから出版され，しかも世界歴史を概観したものだけに，ネールの歴史観を総括的にみることができる．1930年10月26日ナイニ中央刑務所で，14才になった娘インディラの誕生日を祝う形で書き起してから，1933年8月9日付の最後の手紙まで，約3年間にわたる196通から成っている.① 幼い娘にじゅんじゅんと説き聞かせる語り口であるだけに，却ってネールの本心がよく現われている．ネールが40才直前から43才までの時期である．

ここに現われたネール史観の特色は，次の諸点にあるといえる．

a） 世界歴史における西洋中心主義を脱却していることである.②

その点を最も鮮明に描き出したのが，1931年1月8日の「アジアとヨーロッパ」という手紙であろう．少し長いが引用する．

「今日ではヨーロッパは強くて勢力があり，そこのひとびとは，じぶんたちを世界で一ばん文化文明のすすんだ人種だと思っている．かれらはアジアと，その人民をみくだし，そしてアジアの諸国から，手に入れられるものはすべて，うばいとりつゝある．なんと時代はかわりはてたことだろう．……歴史をよめばおまえは，ながいながい間アジアの方が優勢だったことを知るだろう．アジアの人びとは，大波がおしよせるように何回も，何回もヨーロッパを征服した．かれらはヨーロッパを荒しまわり，そしてまたヨーロッパに文化の光をゆきわたらせた．……まことにヨーロッパはながい間，アジアの植民地のようなものだったのだ．

われわれはだれでも，ヨーロッパが大陸の中で一ばんちいさいにもかかわらず，偉大なことを知っている．……ヨーロッパの偉大さをみとめないのはおろかなことだ．しかしアジアの偉大さをみとめないのも，それにおとらずおろかなことだ．……おそらく他のだれよりも，またなにものにもまして世界をうごかした偉大な思想上の指導者——おもな諸宗教の創始者を生んだのは，アジアだということを肝に銘じておこう．現存する宗教のうちの最古のものであるヒンドゥー教は，

---

⑤J. Nehru : Speeches. Vol.1～Vol.5, Publication Division, Government of India. 1958～1968年
J.Nehru : India's Foreign Policy, Publication Division, government of India, 1961

⑥M. Brecher : Jawaharlal Nehru, a Political Biography. 1958
F. Moraes : Witness to an Era, London. 1973
id : Jawaharlal Nehru, New York, 1956
R. Zakaria(ed) : A Study of Nehru, Bombay. 1959
B. R. Nanda(ed) : Indian Foreign Policy, the Nehru years. Delhi. 1976
A.Rao&B.G.Rao: Six Thousand Days. New Delhi. 1974 などを参照した．

いうまでもなくインドの所産だ．いまでは中国，日本，ビルマ，ティベットおよびセイロンを蔽うているその姉妹宗教，仏教もやはりそうだ．ユダヤ教や，クリスト教も，もとをただせばアジアの西端のパレスティナに起源をもつものだから，アジアの宗教だ．ゾロアスター教や拝火教はペルシアに始まったのだし，イスラム教の予言者マホメットは，アラビアのメッカに生れた．クリシュナ，仏陀，ゾロアスター，クリスト，マホメット，それから中国の大哲学者の孔子，老子，――アジアの大思想家の名まえをならべれば，たちどころに数ページは埋まってしまうだろう．――そしてこの年老いた大陸（アジア）は，そのながいまどろみをあとにして，めざめつゝあるのだ．世界の眼はアジアに注がれている．」③

トインビーの「歴史の研究」が出たのは1934―54年であり，ヤスパースの「歴史の起源と目標」が1949年であるのを思えば，ネールが1930年代はじめに西洋中心主義を脱却した世界歴史を書いたのは，全く先駆的であったといえる．

b）ではその代りにどのような立場をとっているかといえば，アジア中心史観といっていいほどに，アジアの比重が大きい．それも中国，インドに限らず，日本，朝鮮，東南アジアと，全アジアを蔽っている．当時日本は世界の5大国の1に列し，朝鮮，台湾を植民地支配し，さらに「満州国」の建国をすすめて，満州を支配しはじめたばかりで，世界の問題になっていたのだから，日本を大きく取扱うのは当然としても，東南アジアまで詳しくフォローしていることは，アジアに注目するネールの史観が徹底したものであったことをうかがわせる．それはいいかえれば，文化相対主義ということである．それぞれの文化に固有の価値があり，どれか一つが絶対ということにはならないという立場である．

c）ネールは，全体として人類は進歩するという進歩史観に立っているといわれる．④しかし随所に，進歩に疑問を出し，進歩ではなくて変化があるのにすぎないのではないかと問いかけてもいる．「現代の多くの国々は，今日の偉大な文明と，科学の奇蹟を誇ってもよい状態にある．まことに科学は奇蹟をなしとげた．……（だが）なお多くの点において，人間は，他の動物にくらべてそれほど大きな進歩をしてはいないのだ，ということを忘れてはいけない．」（「世界歴史」①P.24）とか「すべてのものはたえまなく変化している．」（同①P.29）こうした表現をよくみると，変化しているのは個々の民族，文化であって，人類，世界全体ではないことに気がつく．個々の民族や文化は，個人と同じように，生成し，最盛期に達し，やがて衰滅するが，その盛衰を貫ぬいて全体としての人類は進歩しているというのがネールの見方といえる．130回の手紙「ダーウィンと科学」の勝利の中で，次のように明示されている．

「かれ（ダーウィン）の理論が一般に受け容られた結果の一つは，……進歩の観念が，人びとに植えつけられたことであった．……この種の進歩の観念が，まったく新らしいものであったことは注意するに足ることだ．過

(注)①1939年の改訂増補版に際して「あとがき」1通分が追加された．

②自らも歴史家であったK.M.パニカルは，この「世界史督見」が，西洋中心主義を脱却したものであるとして，ネールの史観を称賛している．
R.Zakaria(ed)：A Study of Nehru, 中のパニカル論文参照．

③邦訳「世界歴史」①PP.30―32

④M.Brecher：Nehru. 1959. P.165

⑤邦訳「世界歴史」④PP.47―48．また「あとがき」の中でもネールは「人間の無限の進歩の可能性」を強調している．⑥P.240

去にあっては，ヨーロッパにも，アジアにも，またどの古代文明の中にも，このような思想は存在しなかったように思われる．ヨーロッパでは，産業革命がはじまるそのときまで，人びとは過去に理想の時代をもとめた．古代ギリシャ・ローマの古典時代……から漸次的な人種的退化，ないしは頽廃が起ったと，人びとはかんがえた．……インドにも，やはりまったくおなじような退化の観念と，過去を黄金時代とする思想がある．……してみれば，人類進歩の観念は，まったく近代的意識に属するものであることがわかる．……こうして進歩の観念があらわれた．そして事実，社会はあらゆる想像をこえた進歩をとげた.」⑤

たゞ西洋のいわゆる進歩史観との大きな違いは，ネールが発展段階論をとっていないことである．原始未開の段階から奴隷制，封建制をへて，資本主義，共産主義に至るというような発展段階論を提示してはいない．

では次に，ネールが世界の諸民族，諸文化をどうみたかを具体的にみて行こう．

3）独立前の世界観

活力を示す4国民—「歴史には，古いそして立派に築き上げられていた文明がいつしか影をひそめ，或いは突如終りを告げたりして，活気にみちた新しい文化に取って代られるという例がいくらでもある．……今日の世界の諸国民の間で，私はこの生々とした精力を主として3つの国民に感じた．——アメリカ人とロシア人と，そして中国人，妙な取合せである.」①ネールはこの3国民に加えて，自らの願望もこめて，インド人にもまた同じような活力を感ずるとのべている．つまり4国民が活力にみちた国民ということになる．まず「アメリカ人はその根源を旧世界にもつものであるにも抱らず，新しい国民であり，張り切った活力をもっている.」「ロシア人は新しい国民ではない．しかも旧来の姿との間に，死にも比すべき，完全な絶縁があった．そして彼らは，歴史上かって前例をみない流儀で，再び新しい肉体を得たのであった．彼らは驚くべき精力と活力をもって若返った.」「中国人の場合は他のどれとも異っている．彼らは新しい人種ではないし，またロシアに襲いかかったような，上から下までの変動の衝撃を通ってきたわけでもない．……しかし中国人の活力たるや驚くべきものである．かくも磐石の底力をさずかっている国民が参ってしまうことがあろうなどとは，私には想像もできない.」「私が中国に見たあの活力に似たものを，私は時としてインドの人々の中にもまた感じたことがある．……私は彼らの間には抑圧された厖大なエネルギーや能力の蓄えがあると感じていた．そして私はこれを解き放って彼らをもう一度若くて活力にみちていると感じさせるように仕向けたかった．インドのような構成の国が世界で副次的な役割を演ずべきいわれはない.」②

この当時,「生々とした精力」(vital energy)で注目された4国民は,インドの独立後は「世界勢力」として現われてくる．戦後インドで日本大使館の開設に当った河崎一郎氏は，ネールの言葉をこう伝えている.「今日では少くとも世界勢力と呼ばれ得る国は，一億の民を有し，広大な国土を持ち，その中に無尽蔵に資源を抱えている国，つまり米国，ソ連，中国,それにインドであるとネールは語った.」③

西欧を引継いだ米国，社会主義の先頭を切ったソ連は，ネールの予測した通り，今日も世界の2つの超大国として，国際政治をリードしているが，それと並べて，中国とインドとをあげたところに，ネールのアジア重視が現われている．

アジア——アジアの中では，中国とインドの2つが圧倒的に抜きんでた民族，文化として描き出されているが，その最大の理由は，文化が歴史を通じて持続した点にあった．

「エジプト，クノッソス，イラーク，そしてギリシャ――それらはみな，ほろび去った．……中国とインドをのぞけば，どこにも文化のほんとうの意味の持続ということはなかった．」④「私は，インドと中国との文明が異常な持続力と適応性を示し，そして多くの変化と危機とにも抱らず，極めて長年月の間，その根本的な同一性を保持するのに成功した事実をうち消すことは出来ない．」⑤

では中国の民族，文化の特色をネールはどうみていたか．

中国――文化が極めて古く，継続している点のほかに，①儒教が非宗教的で合理的であること，②社会が身分によって分断されなかったこと ③一貫して平和的な民族であること，の3点が強調されている．

まず①の宗教についてみれば，「中国では2人の偉人，孔子と老子がいる．……この2人はどちらもふつうの言葉通りの意味では，宗教の創始者ではなかった．かれらは，人間はなにをなすべきかとか，なにをしてはならないかという道徳と，社会的行為の体系をうちたてたのであった．……中国人が，世界じゅうで一番お行儀がよく，洗練されているのも，孔子の教えの影響の一つにかぞえられる」（中国では）宗教は，けっしてドグマ（金科玉条）として，他を異端視することをゆるさなかった．世界の諸民族の中で，おそらく中国人ほど，信仰上のことがらに偏見のない民族はなかったし，いまでもないだろう．」⑥

②については「中国には，まえに話したと思うが，この種の専制政治や，特権階級が存在したことはなかった．大むかしからの試験制度によって，かれらは，だれにでも最高の社会的地位への門戸を開放してきた．」⑦

しかし中国観で最も特徴的なのは，中国が平和な民族であるという見方である．しかもそれが，好戦的な日本人と対比して，くり返し現われている点である．

「日本人は，……中国人とはぜんぜん性質を異にしている．中国人は，古来本質的に平和の民であり，かれらの文明，またかれらの人生哲学はすべて平和的なものだ．ところが日本人は，むかしからいまにいたるまで，戦闘的な民族だ．」⑧

「中国民族は，過度の帝国主義にはしる素質をそなえていなかった．かれらの皇帝のあるものは，たしかに帝国主義者であり，征服の野心に燃えていた．しかしほかの多くの民族にくらべれば，かれらは平和を愛し，戦争と征服を好まなかった．中国ではいつの時代にも，学識者のほうが戦争屋よりもたかい，名誉ある地位を占めていた．それにもかかわらず，中国帝国は，幾度かおそろしく広大なものになった．これは西北からする遊牧種族の，休むことのないいやがらせや，襲撃に刺激された結果であった．」⑨

このような中国民族の平和性に対する信念が，1950年代末から60年代はじめの中印国境紛争に際して，ネールの対応の誤りを生む一つの原因になったといえる．これについては後述する．

日本――①平和な中国と対照的に戦闘的であるという見方が根本にあり，各時代にそれがくり返し言及されているが，そのほかに，②模倣の才能があるということと，③他からは理解できない不可解な×があることが指摘されている．この不可解な×を，もつと突込んで分析したなら，戦後の日本に対するネールの理解は，かなり違ったものになったろう．

①戦闘性について．「日本の古来の宗教はシントー（神道）だった．これは『神々の道』という意味をあらわす中国語だが，自然崇拝と祖先崇拝の混合物であった．それは，後生（死後の生活）だとか，奇蹟だとか，人生問題とかは，あまり問題にしなかった．それは尚武の人種の宗教であった．……日本人は，むかしからいまにいたるまで，戦闘的な民族だ．軍人の主たる徳目は上長と同輩にたいする忠節だが，これがまた日本人の美徳であり，

かれらの強さは多くこれに由来する．神道は，このような徳をおしえる．」⑩

「中国はすでに述べたとおり，本質的に平和な，穏健な国だったが，日本はこれに対して，好戦的な軍事国家であった．……日本では，最高の地位を占めるものはみな軍人であり，大名，もしくは武士の理想を，理想とした．」

「日本はその帝国政策を遂行するにあたって，まったく恥を知らなかった．……朝鮮は日本帝国に合併された．これは1910年のことだった．三千年以上にわたるながい歴史をもつ独立国としての朝鮮はほろびた．」⑫

②模倣の才．「日本人は，みずから奈良という新都を建設し，これを長安そのままの模型にしようとした．日本人はむかしから，他人の模倣にかけては天才的な才能をもっていたものとみえる．」⑬「日本がばく進をはじめ，西洋諸国を模倣してさまざまの観点から，それらの競争者となったのは，かれ（明治天皇）の治世のことだ．この一代のうちにもたらされた，はかり知れない変化はまさに驚異であり，……日本は産業の方式においてばかりでなく，帝国主義的政策についても，ヨーロッパのあとを追った．日本はヨーロッパ列強の忠実な弟子より以上のものであり，しばしばかれらの上を行きさえしたのだ！．」⑭

③不可解な×．しかしネールは日本について，何かもう一つ異った才能があるのではないかという感じをもっていた．それを驚異とか奇蹟という言葉で表現している．それはまず，徳川時代の鎖国について現われる．

『この鎖国はまことに異常な現象で，有史以来，他のいかなる時代，いかなる国にも，類例をもとめることはできない．神秘のとばりにつつまれたティベットや，中央アジアでも，隣国との交通が断えたことはなかった．……そして1853年をさいごとして，ふたたび扉と窓とをあけなったときには，日本はまた一つの奇蹟を成就した．日本は驀進をはじめうしなわれた時をうめあわせた．」⑮「20世紀のはじめ，アジアの精神に大きなえいきょうをおよぼした事件がおこった．これはロシアの，日本にたいする敗北であった．……日本は，西洋の侵略とたたかうアジアのチャンピオンとあおがれ，しばらくは，全東洋にひじょうな人気をあつめた．」⑯

このような日本の不可解さ，驚異を，ネールは日本の特異性とみている．

「日本は入念に西洋の工業と，西洋風の生活様式を採用したが，しかもこころの底は封建的であった．」⑰「日本は，近代的工業文化と中世的封建主義との，また議会主義と，専制政治および軍事的支配との異例の混合物であった．……天皇は，じつは，その名において，大土地所有者的，軍事的支配階級が権力を揮うための象徴であった．」⑱

(注)①「インドの発見」㊤P.63
②　同　PP.63—64
③河崎一郎著「素顔の日本」PP.253
④「世界歴史」①P.35
⑤「インドの発見」㊤P.185
⑥「世界歴史」①PP.74,75. P.201　ほぼ同じ表現を「インドの発見」の中にも見出すことができる．「インドの発見」㊦P.725
⑦「世界歴史」①P.285　286
⑧　同①P.211
⑨　同①PP.289,290　明朝は②P.164
⑩　同①P.212　⑪　同①P.296
⑫　同③P.222　⑬　同①P.212
⑭　同③PP.206～209
⑮　同②PP.174,175
⑯　同③P.116　なおこれについては「自伝」㊤P.30に「日本の戦勝は私の熱意を沸き立たせ，新しいニュースを見るため毎日新聞を待ち焦れた．相当の金をかけて日本に関する書籍をたくさん買いこんで読もうとつとめた」とある．ネールはこのころ14才であった．
⑰「世界歴史」⑤P.8　⑱　同⑥P.41

(1980年9月24日受付)